

ダブルメジャー で生涯現役

副業もOK、複数の専門を持つ

一つの会社で、一つの職業を続ける時代は終わった。

長く働くには、複数の武器が必要だ。

複眼的視点が価値や儲けを生み出すのだ。

退職後の給料は先細り

中小企業診断士の中津山恒さん(52)は、もともとは富士ゼロ



中小企業診断士
中津山 恒さん(52)
 経営のかかりつけ医となっ
 て、中小企業の問題解決を
 手助けしたい。本当は困っ
 てから解決するのではなく、
 余裕を持って将来を構築し
 ていきたい

ツクスに勤める研究者だった。年金の支給開始年齢が段階的に引き上げられ、65歳になると再雇用制度があるものの、給料は3分の1に減ると聞いた。にわか心配になり、退職後の資金についてリサーチを始め、2007年にファイナンシャルプランナー(FP)の資格を取った。

そのころ、中津山さんはあるジレンマを抱えていた。入社後、ソフトウェア開発の研究者として技術一本でやってきた。ところが、社内公募で別の部門に移り、マーケティングや製品企画に携わってみると、まったく違う視点が求められた。つまり、技術者の視点だけでは通用しなかったのだ。

「ているのかもしれない」

65歳、70歳まで働くことを考えると、漠然とした不安におそわれた。定年後に転職をしたら、収入は先細る一方だろう。それならば、いま自分の強み、弱みを棚卸して、生涯現役のために打てる手があれば打っておくうではないか。

会社にある独立支援制度を使った。業務全体の10〜40パーセントの時間を自分のために使って、兼業申請もできるという制度があった。

それまで論文でしか接してこなかった英語を学び直し、08年

にTOEIC950点、11年に通訳案内士の資格を取り、中小企業診断士にも合格した。

今年6月に独立して、英語とITを強みに中小企業のコンサルティングをする。業務プロセスの改善にも役立つITスキルと、自分のマネジャー経験や資格取得を経て得たコンサルティングスキルを融合させ、多角的にアドバイスしている。

会社員時代、ソフトウェアの開発をするときなどは、いつまでに何をするか、スタッフの役割、作業分担、リーダーシップ、工程などを細かに体系化してきた。こうした「理系」のプロセスを、海外協力事業などコンサルティングの場にも落とし込む。「ITのプロジェクト経験があるからこそ、理系と文系を合わせたマネジメント思考が役に立っています」